遊びは学び
遊びの充実をめざして

鳥取大学附属幼稚園
鳥取大学地域学部附属 子どもの発達・学習研究センター

鳥取大学附属幼稚園では

本園は、子どもたちの自主性を尊重し、子ども主体の保育であり、自由感あふれる幼稚園でありたいと願っています。子どもが自ら遊びを見つけ、試行錯誤し、遊びを深める中で様々な経験をすることを大切にしています。一日の保育の流れの中で中心となる「自ら選んだ遊び」では、保育者はねらいをもって計画的に環境を構成しています。子どもは、その環境の中から、自分がやってみたい遊びを選び、時間や場を決めて心ゆくまで遊びます。その過程で生まれた意欲や感動、培われた社会性やたくましさなどは、小学校以降の生活や学習における意欲の芽生えとなるものであり、生涯にわたって学び、自ら伸びていこうとする態度の基礎となるものと考えています。

附属幼稚園の保育の中にあるもの

○自由保育は、子どもの自己肯定感を育てます

本園では、子どもたちの自主性・自発性を尊重する“自由保育”を大切にしています。自由保育の自由とは、一般には子どもたちが自分で好きな遊びを選ぶ自由を意味しています。確かにそれも重要ですが、評価からの自由も忘れてはいけません。他人の評価を気にせずに思う存分遊べるすばらしさです。人の評価を気にしすぎては、その子らしさは育ちません。そうして自己肯定感を育むのが自由保育なのです。

○自由保育は、放任ではありません

保育とは「やすんじはぐくむ」ものです。保育に放任はありません。保育者は、幼い子ども同士の関係をよりよくし、遊びが広がり深まるように援助します。一方、自由には責任が伴います。子ども同士の遊びでも、ごっこ遊びの役を引き受ければそれを最後まで演じなければなりません。自由保育では、保育者は過度の介入をすることなく、子どもが自由な遊びの中で自分勝手が許されないことをしっかり学ぶことを保障しています。

○自由保育は、設定保育です

自由保育の反対は、一斉保育だと言われます。一斉保育は、保育者が活動を設定しますから、通常は設定保育と同じに理解されます。しかし自由保育では、保育者は子どもがよりよく遊べるように様々な環境の構成や設定を行います。「保育とは環境を通して行う教育」と言われる通りです。そうすると、本物の自由保育かつ設定保育となるわけで、それが本園の保育形態に他なりません。実はそれこそが最も幼稚園らしいあり方なのです。

鳥取大学地域学部教授　塩野谷　斉

遊びの充実の重要性

幼児期の子どもにとって遊びは学びです。

子どもが興味・関心・意欲をもって自ら環境に働きかけたり、環境から刺激を受けたりして遊びが生まれ、その遊びの中で学びが生まれます。本園では、発見したことやできたこと、分かったことだけでなく、うれしい、楽しい、悔しいなどの心情や友だちや保育者とのかかわり、問題を解決していくために考えたり行動したりして試行錯誤していくことなども「学び」ととらえています。

子どもは夢中になって遊んでいるときに、たくさんのことを学んでいます。本園の研究では、遊びの充実をめざすことにより、子どもたちの好きな遊びを質の高い学びにつなげようと、環境の構成や保育者の援助の在り方を探っています。遊びは幼児の主体性を育む重要なものであり、遊びの充実は、本園にとっても大きな課題です。

さらに、幼児期に育てたい力を明確にした本園のカリキュラムに基づき、ねらいをもった保育を展開する中で、意図的・計画的に環境を構成すること、子どもの育ちに見通しをもって保育を進めることについても、さらなる充実を図ってきたいと思います。

遊びが充実しているとは

「遊びが充実している」というのは、保育者が、日々の保育の中で感じ取った子どもの遊びの姿であり、保育者がとらえた姿ではないでしょうか。そこで、園内研修で「遊びが充実している」ととらえた幼児の姿を話し合ったところ、次のような姿が挙がりました（表１）。もちろん、子どもたちの遊びはいつも充実した遊びばかりではないかもしれません。遊びというのは、何がきっかけでどのように始まるかわかりません。何して遊ぼうかなと考えている時間、遊びと遊びの合間にふと立ち止まる時間、こんな時間や何気ない遊びも大切にしたいと思います。

（表１）A 遊びに意欲的に取り組む
B 同じことを飽きることなく何度も繰り返す、失敗しても繰り返す
C「心が動く」ことで遊びに楽しさを感じる
D 時間がたつのを忘れるほど集中する
E 目標やめあてをもつ
F「もっと～したい」という思いが出てくる
G 遊びに必要なものがわかり、準備する
H 場、素材、道具を使いこなす
I 友だちと一緒に遊ぶ楽しさを味わう
J 友だちと思いを調整しながら、やりたいことを実現する
K 充実感、達成感を味わう
L 今までの経験をいかす、経験がつながっている
M 新しい遊びを創り出す　　など

子どもたちの遊びを見ていると、３歳、４歳、５歳と段階的に遊びが充実していく場合と、それぞれの時期、その場、その場で遊びが充実する場合の両方があるように感じています。また、遊びの種類、年齢、時期などによっても、遊びが充実している姿は異なります。さらに、その姿を支える保育者の援助や環境の構成は、各年齢によっても異なります。

「おうちごっこ」を例に考えてみます。３歳児は、保育者や気の合う友だちと一緒に安心して、それぞれが好きな遊びを楽しんでいます。保育者は、家庭的な雰囲気がある「ままごとコーナー」に、見立てがしやすくイメージの共有がしやすい、本物みたいなごちそうや食器をそろえ、気の合う友だちと一緒に遊びを楽しめるようにしています。また、一緒に遊びながら、遊び方のモデルを示すようにしています。４歳児になると、自分たちで「ままごとコーナー」の道具を移動させたり、役割を決めたりしてイメージを実現しようとします。また、遊びに必要なものを自分たちで作って表現しようとするので、保育者はその思いを受け止め、材料や素材を準備したりします。しかし、お話を展開したりイメージを共有したりする力がまだ十分ではないので、遊びが途中で終わってしまうこともあります。５歳児になると、おうちごっこのストーリーを本格的に作っていくことができるようになってきます。さらに、友だちとイメージを伝え合いながら遊びを展開するようになるので、「ままごとコーナー」で遊ぶのではなく、自分たちのイメージに合う場や空間を、時間をかけて作っていくことを楽しむようになってきます。そして、場の設定、遊びに必要な道具など、より本物らしさにこだわるようになってきます。また、友だち関係が密になる５歳児後半には「協同」する場面が多くなってきます。保育者は、お互いのイメージをクラス全体に伝え合う場を設け、相談して遊びを進める過程を大切にしながら、思いを実現できるようにアイデアや材料を用意しています。

このように、保育者が、子どもたちが安心して自己発揮できる場を作り、豊かな環境を整えていくとともに、理解者、共同作業者、あこがれを形成するモデルとしての役割などを果たすことが遊びの充実につながっていくと考えています。

※このリーフレットでは、秋の遊びを中心にして、事例をもとに「遊びの充実」と保育者の援助のポイントを明らかにしようと試みました。

～3歳児～

＜初めての集団生活に出会う時期＞

みつけた！すきなあそび

「あきのみ」あつめ　保育者と一緒に

　ドングリやマツボックリをたくさん見つけ、集める楽しさを感じながら毎日コップや袋に集めていきました。「たくさん」になると「重くなる」ことなどにも気づいていきました。
　入れ物に入れるときの音がおもしろく、「きいて」と保育者をよぶ姿も見られました。

ドングリころがし　繰り返し遊んで

　自分たちで集めたドングリやマツボックリを転がして遊んでいた子どもたち。テーブルで坂を作るとさっそく転がして遊び始めました。１つ転がす、たくさん転がす、友だちと競争する、入れ物に入れてひっくり返して転がすなど、転がし方を少しずつ変化させながら友だちと繰り返し遊びました。どれが速く転がるか考えながらマツボックリを選ぶ子どももいました。
　数日すると、トイレットペーパーの芯をつないで道を作り始めました。友だちの遊ぶ様子を見て、自分もしてみようとする姿が多く見られます。
　保育者と一緒に道を作り、うまくドングリが下の入れ物に入ると、みんなで「やった！」と大喜びしました。

あきのみケーキ

　集めたドングリや花を使って、砂で作ったケーキを飾りました。できあがると、保育者をよんで一緒にケーキを味わいました。

素材の特徴をいかして

おちばあつめ　興味をもって

　たくさんの落ち葉を踏みしめる音を聞き、落ちばの匂いをかぎながら、落ち葉あつめをしました。
　落ち葉を１枚１枚めくりながら、「顔より大きい！」と自分の顔と比べてみたり、「きれいなのあつめよ」「かわいい形」とつぶやいたりしました。一人一人のこだわりや落ち葉への興味がみられます。

おちばジャンプ　繰り返すことで自信をもって

　たくさん落ち葉がたまっているところへ、アスレチックの一本橋の上からジャンプ！飛び降りたときの足に感じる落ち葉のふかふかの感覚や、音を感じています。
　初めは、こわがっていた子どもも、繰り返し楽しむうちに自信ができ、「せんせいみてて」とポーズをきめながらジャンプする姿がみられました。

おちばのおふろやさんごっこ

　段ボール箱に落ち葉をたくさん入れて「おふろやさんごっこ」が始まりました。『おふろ』という生活に身近なイメージを友だちと共有しながら、一緒に遊ぶ楽しさを感じています。
　すると、楽しそうな様子を見て、「ぼくも」と新たに友だちがやってきました。「せまい」「ぎゅうぎゅうづめだ」と、体験を通して感じたことを、素直に言葉で表現しながら遊んでいます。お友だちと“ぎゅうぎゅうづめ”も楽しい子どもたちです。

友だちと一緒がうれしい

援助のポイント

- 五感を通して感じること、素材そのものを使って遊ぶ楽しさを感じることを大切にしています。子どもたちが体験を通して気づいていくことも大切にしていきます。
- 興味をもった遊びを楽しむうちに、自分のすきな遊びへとつながっていきます。遊びの楽しさを十分に味わうこと、繰り返し行うことで「できる！」という自信がもてるように、保育者も一緒に遊びながら援助していきます。
- 友だちと一緒に遊ぶ楽しさを感じられるように、友だちが遊んでいる様子を伝えたり、思いが伝わるように仲介したりしていきます。
- その子どもなりのイメージや工夫を認め共感しながら、思いが実現できるように援助していきます。

～4歳児～

＜遊びが充実し、自己発揮する時期＞

友だちといっしょって　いい！

不思議さをためして

ドングリころがし①

壁に立てた段ボールと紙筒を使って、ドングリ転がしづくりが始まりました。自分たちの思った方向にドングリが転がるように何度も何度も角度を変えて転がしていきます。友だちと、どうしたら転がるか相談しながら作っていきました。しばらくすると、ガムテープを切る、紙筒を押さえるなど自分たちで役割分担をしていきました。繰り返し試行錯誤する中で、ドングリは上から下に転がっていくこと、角度が急になると速度が速くなることなどに気づいていきました。

友だちと感動を共有して

ドングリころがし②

ドングリを転がす道ができると、友だちと一緒に転がる様子を確かめ始めました。お互いに声を掛け合いながら遊んでいきます。１回でうまくいかなくてもあきらめることなく、紙筒の角度や箱の位置を調整しながら繰り返し試していきます。思い描いたように転がり、下の入れ物に入ると、友だちと一緒に喜び、満足そうな表情が見られました。

違いに気づいて

マラカスづくり

年少でドングリマラカスを作った経験をいかして、マラカスづくりを始めた子どもたち。ペットボトル、紙コップ、空き容器などにドングリを入れて音を試していきました。さらに、中に入れる物もビーズ、小石などで試していきました。ドングリも大きさや数によって音が違うことに気づきました。何種類も作り友だちと一緒に音をならして違いを確認し合っていました。

自分のお気に入りのマラカスができると、友だちに「きいて」と言いながら演奏会が始まりました。

イメージを共有しながら

おかしやさんごっこ

ドングリやマツボックリを使ったお菓子づくりでは、より本物のように作りたいと、材料を保育者と一緒に考えて準備し、色合いを考えて作っていきました。

たくさんお菓子ができあがると、「おかしやさんを作ろう」と友だちと相談して作り始めました。大きな段ボールに窓を開け、布や包装紙でカーテンをつけたり、お菓子を置く棚を作ったりと次々イメージを膨らませていきました。「先生、〇〇がほしい」と遊びに必要な物を伝えることも増えてきました。

友だちとおしゃべりをしてイメージを伝えながら遊びを進めていきます。

おかしやさんごっこでは、店員や客になりきってやりとりを楽しみました。

援助のポイント

- 子どもが遊びの中で何をおもしろいと感じているのか、子どもの気づきやこだわりを大切にしています。
- 自ら試す姿を見守り、子どものアイデアを認めたり、ともに考えたりしていきます。また、子どもの「～のようにしたい」という思いを受けとめ、より遊びが工夫できるようにしていきます。
- 友だちと遊ぶことで、友だちからの刺激を受けたり、共通の体験をしたりすることが遊びの広がりや深まりにつながります。そのため、友だち同士でイメージを伝え合いながら遊びを進めていくことができるように、必要に応じてお互いの思いを橋渡ししていきます。

～5歳児～

＜互いに学び合い、めあてに向ってともに協力する時期＞

みんなですると　やっぱり　すごい

試行錯誤しながら

ドングリパチンコ

板に何本も釘を打ち、ドングリを転がすパチンコを作りました。ドングリを１つずつ転がしたり、１度にたくさん転がしたりして、転がり方の面白さや釘に当たる音のすてきさにも気づきます。釘の長さや間隔、打つ力加減などを工夫して作っていきます。失敗をふまえながらよりよいものを作ろうとしていました。

納得いくまで

ドングリころがし

紙筒、牛乳パックなどを使い、ドングリを転がすゲームを考え、壁から傾斜をつけたテーブルの下まで転がす道を作りました。転がる様子が見えるように、牛乳パックを切ってトイのようにし、つなぎ部分の曲げ方やテーブルの角度、ドングリの大きさや形にもこだわりました。ゴールまでスムーズに転がるイメージをもって友だちと相談しながら、納得いくまでドングリころがしを作っていきました。お互いにアイデアを出し合ってどんどん複雑なものへと変わっていきます。

遊びに必要なものや数を考えて

ドングリケーキ

紙粘土に絵の具を混ぜ、ドングリを乗せて、クッキーやケーキを作りました。セロファンでドングリを包んだキャンディーは、みんなに買ってもらえるようにたくさん用意しました。こんなおみせがしたいというイメージを互いに伝え合って、作る品物の種類や数、色合いなどを考えながら作ります。

みんなの思いを伝えあって

話し合い

おみせの品物やメニューなどを保育者や友だちと話し合ったり、日にち、時間、役割分担などを相談しました。困ったことや協力して欲しいことなどは何度も話し合い、折り合いをつけながらみんなが納得しておみせが開けるように考えます。また、先の見通しをもち、スムーズにできるように段取りを考えます。自分たちのことだけでなく、小さい組の子どもたちのことも考えた意見が出ました。

先の見通しをもって

段取りを考えて

援助のポイント

- 子どもたちの試行錯誤する姿や挑戦する姿を見守り、十分な時間を保障していきます。
- 自分ひとりではできないことでも、みんなで力を合わせるとできることを知り、友だちのよさに気づいていけるように一人一人の意見や思いを大切にしていきます。
- 子どもから出された問題や疑問に対し、話し合いの場や機会を設けることは必要感のある話し合いになります。自分の思いだけでなく友だちの思いにも触れ、みんなのことを考えたり、時には折り合いをつけたりしながら活動が展開できるようにしていきます。
- 友だちと一緒にめあてに向かってやり遂げることで、充実感や達成感を味わい、次の新しい遊びを創り出す力につながります。

～異年齢～

＜かかわりをひろげる・深める＞

みんなのために

お互いを意識して

看板

お金

ドングリころがしやさん

お客さんが来店すると、年長児が、お金が必要なことや遊び方を説明します。きちんと並んで年長児の話を真剣に聞く年中児の姿がみられます。年長児は、小さい組の子どもたちが困らないようにやさしく丁寧に話をします。

より本物らしさにこだわって

メニュー表

あきのレストラン①

いよいよおみせやさんが開店し、年少・年中児もやってきました。「あきのレストラン」では、レジ係、運ぶ係、案内係など、役割を決めて取り組みました。レストランらしい言葉のやりとりが見られました。小さい組の友だちが楽しめるようにやさしく声をかけたり、教えたりする姿には、誇らしささえ感じられました。

本物らしさを楽しんで

あきのレストラン②

年長児は、ファミレス風に廊下にいすを並べます。年少・年中児は、年長児のおみせやさんに期待とあこがれをもって来店し、メニューを見てワクワクしながら順番を待ちます。ファミレスの雰囲気を十分に感じつつ、遊びに参加します。次の日、自分たちも真似をして遊んでいた年少・年中児でした。

満足感や達成感を味わって

ドングリマラカスやさん

年長児はドングリマラカスの使い方を教えたり、曲を準備したりして、おみせやさんに徹します。年少・年中児は、教えてもらったとおりに、自分たちの遊びとはひと味違う年長児の遊び方を楽しみます。年長児は、小さい組の友だちが楽しんでいる姿を見て、満足感や達成感を味わいます。

援助のポイント

- 一緒に遊んだ楽しい経験は、遊びの伝承につながります。日々の遊びの中で自然に異年齢のかかわりが生まれるようにしていきます。年長児の遊びが充実し夢中になって遊ぶ姿が、年少・年中児に伝わるように働きかけます。
- 自分たちの楽しみだけでなく、小さい組の友だちのことも考えて取り組んでいる年長児の姿を認め、思いが実現できるようにしていきます。そのことにより、年長児としての自覚や自信がより高まっていきます。同時に、年長児は、年少・年中児にとってあこがれの存在となります。あこがれは、発達のエネルギーです。

幼児教育から小学校教育へ

幼児期では、遊びが学びであるのはいうまでもありません。個々の遊びの中にも学びは多くありますが、小学校への接続を考えたときには、子ども同士がかかわり合って遊ぶ中での学びが大きな意味をもちます。個人が勝手に自分の都合で遊ぶ（学ぶ）のではなく、相手とやりとりしながら遊ぶ（学ぶ）ことが、小学校での学習の基本型となります。中でも①興味や関心の広がり、②協同的な学び、③気持ちの伝え合い、などが重要な要素でしょう。

幼小の接続を考えるとき、私はいつも鍋料理をイメージしてしまいます。上述した要素が鍋の具材です。良質な具材があってこそおいしい鍋料理になります。しかし、具材だけでは食べられません。鍋として調理する過程があって鍋料理となるのです。具材を調理してまとめあげるのが、幼児教育であるし、小学校で学ぶ土台になるのです。

鳥取大学地域学部教授　小枝　達也

保育の本質を大切にする実践

“日本の幼児教育の父”といわれる人に倉橋惣三（1882-1955）がいます。彼は幼児の遊びの自由を尊重することを強く主張しながら、同時に保育者がそれを援助することの必要性をとなえました。幼児の興味関心は“刹那的”なので、ときにはそれに方向を与える“誘導”が求められ、それによって幼児はさらに充実できるというのです。

幼稚園では、幼児が自由に遊ぶとバラバラで自分勝手になるのではなく、その先には協同性や気持ちの伝え合いがあるのです。それは小学校以上の学習の土台となる力です。時代の変化に対応するのはもちろんですが、同時に、長い歴史の中で大切にされてきた保育の本質を守りながら日々実践が行われることを願っています。

鳥取大学地域学部教授　塩野谷　斉

〈参考文献〉鳥取大学附属幼稚園研究報告第 31 集（平成 24 年）・32 集（平成 25 年）
・「幼児期から児童期への教育」国立教育政策研究所　教育課程研究センター（平成 17 年 2 月）
・「幼稚園教育要領解説」文部科学省（平成 20 年 10 月）

平成 27 年 1 月 30 日発行